

1 全ての子どもたちが、確かな学力を身に付けるために

ポイント1：全学年・全教科体制で、学力向上に取り組みましょう

各設問には、様々な教科、特別活動等の学習や実生活と関連した場面が取り上げられています。



小学校の先生も、中学校の先生も、どの教科の先生も、以下の問題について、どの教科等の学習と関連があるのか考えながら解いてみましょう！

平成28年度 中学校 国語B 1 二

問 【博物館のちらし(裏)】にある関連イベントの「～職人の技を見てみよう～」に参加することができる日付として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 2016年5月21日
3 2016年5月23日

- 2 2016年5月22日
4 2016年5月24日

「伝統文化」というと遠い存在のように感じられますが、実は今の暮らしの様々なところに息づいています。

「暮らしの中の伝統文化展」の第1期は、「うるしの世界」を取り上げます。私たちの暮らしの中にある漆のよさを実感してみませんか。

うるしの世界

おわんや重箱などに代表される漆製品は、優美だけでなく、丈夫で長持ちする実用性の高さも兼ね備えており、私たちの暮らしの中で育まれてきたものです。

展示内容(1階展示室)

展示コーナー① 漆製品の歴史
展示コーナー② 原料としての漆の性質
展示コーナー③ 漆製品の製造工程
展示コーナー④ 暮らしの中の漆製品

関連イベント

～漆製品を使ってみよう～
漆の器とスプーンでアイスクリームを味わいます。また、使用後の手入れの仕方も体験できます。漆の器の美しさや手触りのよさなどを感じてみませんか。

日時：開催期間中の土曜日 午後3時～午後4時
場所：1階特別室
定員：20名(無料・当日受付)

～職人の技を見てみよう～
この道30年の職人による漆塗りの実演を見ることができます。交流する時間もありますので、伝統を受け継ぐ職人としての思いなどを直接聞いてみませんか。

日時：開催期間中の日曜日 午前10時～午前11時
場所：1階ホール
定員：50名(無料・当日受付)

【博物館のちらし(裏)】

**暮らしの中の
伝統文化展**

第1期
うるしの世界

2016年 5月21日(土) - 6月19日(日)

開館時間：午前9時30分～午後5時
休館日：月曜日
入館料：一般300円 大学生・高校生200円
中学生以下無料

第2期：「和紙の世界」6月25日(土)～7月24日(日)
第3期：「織物の世界」7月30日(土)～8月28日(日)

草木市立博物館
〒900-9859 草木市南町7
電話 000-123-xxxx
http://www.hakubutsukan.xx.jp

【博物館のちらし(表)】

1 次の「博物館のちらし(裏)」と「博物館のちらし(表)」を読んで、あとの問いに答えなさい。

社会生活の様々な場面で、ちらしやポスター、パンフレットなどを目にする機会があります。また、学校生活の中でもこれらを読んだり、作成したりする機会があります。

この問題では、博物館のちらしを取り上げています。ちらしを読んで、そこから「暮らしの中の伝統文化展」を開催するねらいを捉えたり、目的に応じて情報を関連させながら読み取ったりすることに加え、ちらしの表現の工夫やその効果について、根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くことを求めています。

※ 県速報値【84.5%】 県無解答率【0.2%】

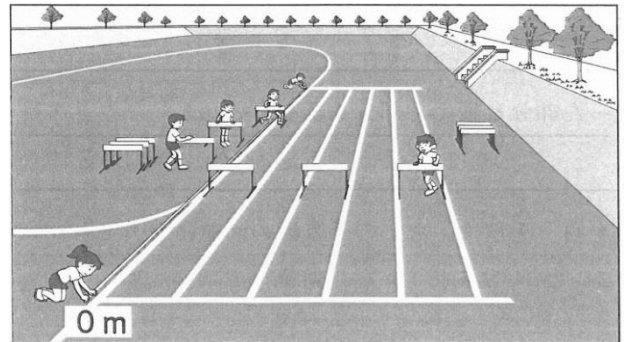
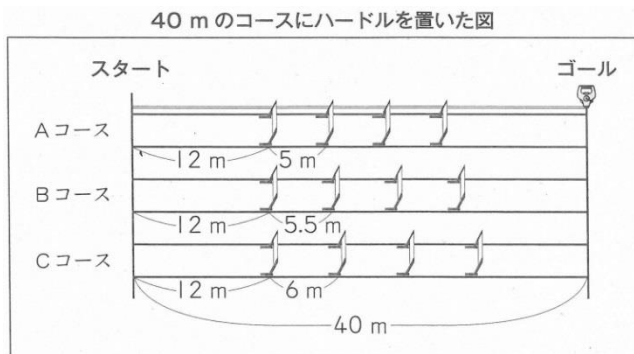
問 体育の時間に、40mハードル走を行います。

(～中略～)

(1) Aコースは、スタート地点から1台目のハードルまでが12mで、ハードルとハードルの間が5mです。

スタート地点に、巻き尺の「0m」のところを合わせると、Aコースの4台目のハードルを置くのは、巻き尺の何mのところになりますか。

求める式と答えを書きましょう。



日常生活の事象を数理的に捉え、式に表現することで、能率的に処理したり合理的に判断したりすることは、生活を豊かにする上でも重要です。この問題では、体育科のハードル走の学習場面において、ハードルの位置を特定したり、与えられた式に数値を当てはめて目標のタイムを求めたり、与えられた式の中の数値を解釈したりする場面が設定されています。

上の問題は、ハードルの数とインターバル（ハードルとハードルの間）の数の関係を正しく捉え、アプローチ（スタート地点から1台目のハードルまで）の距離を踏まえて、4台目のハードルの位置を特定することができるかどうかを見るために出題されています。

県速報値【55.6%】 県無解答率【2.9%】

他の設問においても、例えば、中学校・国語A問題「歌『ふるさと（小学校音楽科共通教材）』に表れた作者の思いを想像する」、小学校・算数B問題「小学校入学前の子どもたちに渡すメダルを作るために、材料が足りているか判断する」など、様々な教科等の学習や実生活と関連した場面が取り上げられています。

※本資料で扱うデータについて

- 本資料において示されている「【県速報値】【県無解答率】」は、県内の小・中学校から御提供いただいた、平成28年度全国学力・学習状況調査の自校採点結果を集計したものです。「県内の一部の児童生徒の結果であること」「学校間で採点の仕方に違いがあること」等から、8月末に公表される本県の調査結果の数値と一致するとは限らないことについて、あらかじめ御留意ください。なお、御提供いただいた学校数等は、次のとおりです。

調査結果 提供校	小学校	学校数	241校
		児童数	10,617人（全小学校6年生に占める割合：約57.7%）
	中学校	学校数	103校
		生徒数	4,641人（全中学校3年生に占める割合：約24.2%）

* 提供学校数、児童生徒数は、教科によって異なっており、上記は最大数を示しています。

ポイント2：「解説資料（国立教育政策研究所 4月発行）」を活用しましょう

1 「解説資料」について

本資料は、平成28年度全国学力・学習状況調査の実施後、各教育委員会や学校が速やかに児童生徒の学力や学習の状況、課題等を把握するとともに、それらを踏まえて調査対象学年及び他の学年の児童生徒への学習指導の改善・充実等に取り組む際に役立てることができるよう作成されています。

（国立教育政策研究所のHPからダウンロードもできます＝<http://www.nier.go.jp/16chousa/16chousa.htm>）

◆内容

- I 調査問題作成に当たって
 - ・調査問題作成の基本理念、問題作成の枠組みについて解説
- II 調査問題一覧表
 - ・問題の概要、出題の趣旨、関係する学習指導要領の領域等、評価の観点、問題形式をまとめた一覧表
- III 調査問題の解説
 - ・出題の趣旨、解説（学習指導要領における領域・内容、解答類型等）、学習指導に当たって等を記載
- IV 解答用紙（正答（例））
- V 点字問題（抜粋）
- VI 拡大文字問題（抜粋）

前ページの「40mハードル走」の【問題の解説】をみましょう。



2 「Ⅲ 調査問題の解説」による問題理解

小学校算数「解説資料」P.54～63より（抜粋）

算数B 2 日常生活の事象における数学的な表現の活用と解釈（ハードル走）

（問題内容）

1. 出題の趣旨

日常生活の事象を数理的に捉え、場面を適切な式に表したり、式の意味を具体的な事象と関連付けたりすることで問題を解決することができるかどうかをみる。

- ・示された図や情報を基にももの位置の関係を式に表し位置を特定できること。
- ・～

日常生活の事象を数理的に捉え、式に表現することで、能率的に処理したり合理的に判断したりすることは、生活を豊かにする上でも重要である。

そこで、本問題では、～
設問（1）は、～

2. 解説

設問(1)

趣旨

示された情報を基に、ハードルの数とインターバルの数の関係を把握して式に表し、4台目のハードルの位置を求めることができるかどうかをみる。

■学習指導要領における領域・内容

〔第3学年〕 D 数量関係

（2）数量の関係を表す式について理解し、式を用いることができるようにする。

ア 数量の関係を式に表したり、式と図を関連付けたりすること。

〔第4学年〕 D 数量関係

（2）数量の関係を表す式について理解し、式を用いることができるようにする。

ア 四則の混合した式や（ ）を用いた式について理解し、正しく計算すること。

■評価の観点

数量や図形についての技能

「〇〇ができるかどうか」
問われている力



授業で、身に付けたい力を
明確に捉える

学年間の学習内容の
つながり（系統性）を
捉える

解答類型

問題番号	解答類型	正答	
2 (1)	(注意) 式については、答えの有無や答えの正誤は問わない。 乗数と被乗数を入れ替えた式なども許容する。		
	式 答え		
	1 アプローチとインターバルの距離を分けて正しい式を解答 例 $12 + 5 \times 3$ 例 $12 + 5 + 5 + 5$	27 と解答しているもの	◎
	2 アプローチとインターバルの距離を合わせて正しい式を解答 例 $17 + 5 \times 2$ 例 $17 + 5 + 5$	27 と解答しているもの	◎
	3 言葉が含まれている式を解答 例 $12 + 5 \times \text{ハードルの間の数}$	51、44 と解答しているもの 27、51、44 以外を解答しているもの 無回答	○
	4		
	5 類型1から類型3の式を解答	27 と解答しているもの	
	6 類型1から類型5以外の式を解答 無解答		
	7 5×3 と解答しているもの $5 + 5 + 5$ と解答しているもの $12 + 5 \times 4$ と解答しているもの $12 + 5 + 5 + 5 + 5$ と解答しているもの 5×4 と解答しているもの $5 + 5 + 5 + 5$ と解答しているもの		
	8		
9 上記以外の解答			
0 無解答			

「◎」は解答として求める条件を全て満たしている正答、「○」は設問の趣旨に即し必要な条件を満たしている正答

一人一人の誤答の状況
“どのようにつまづいているのか”を捉える

誤答の要因“どうしてつまづいたのか”を捉える

経年変化から、指導改善の成果と課題を捉える

■正答について

本問題においては、アプローチの距離が12mであること、Aコースのインターバルの距離が5mであること、4台目のハードルまでにインターバルが3つあることを正しく捉える必要がある。このことを基に、 $12 + 5 \times 3$ と立式し、計算の順序についてのきまりに従って4台目のハードルの位置を27と求める。

■誤答について

【例1】 【式】 $12 + 5 \times 3$ (解答類型4)
【答え】 51

計算の順序についてのきまりを意識せず、 $12 + 5$ から順に計算していると考えられる。

【例2】 【式】 $12 + 5 \times 4$ (解答類型8)
【答え】 32

ハードルを4台置くと3つのインターバルがつくられることを捉えず、ハードルの数を当てはめて計算していると考えられる。

(参考)

○関連する問題

問題番号	問題の概要	正答率	解説資料	報告書
H27B 3 (1)	周の長さが24mの正三角形を巻き尺でつくるために、それぞれこの目盛りのところを持ってよいかを書く	32.8%	P. 63~P. 68	P. 77~P. 78

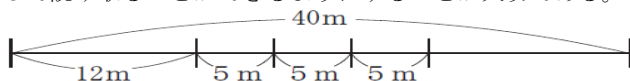
3. 学習指導に当たって

日常生活の事象を数理的に捉え、場面を適切な式に表したり、式の意味を具体的な事象と関連付けたりすることで問題を解決する学習を充実する

① 示された図や情報を基に、場面を的確に捉えることができるようにする (対応設問：設問(1))

問題解決においては、示された情報や図を基に、問題場面を的確に捉えることが大切である。

指導に当たっては、例えば、設問(1)を用いて、 $12 + 5 \times 3$ と $12 + 5 \times 4$ のどちらの式が正しく問題場面を表しているかについて話し合う活動を取り入れることが考えられる。4台目のハードルの位置を特定するために、問題場面を以下のような図に表すことでハードル4台を直線上に表すと、そのインターバルの数がハードルの数より1少ないことが明らかになる。このような活動を通して、児童自ら、場面を図に表して読み取ることができるようになることが大切である。



② 問題の解決のために、適切な数値を当てはめて、式を活用することができるようにする (対応設問：設問(2)) ~ 略 ~

■学習指導に当たって
学習指導の改善・充実を図る際のポイントが記述してあります。調査問題に関係する領域・内容について、各学年での日々の学習指導に際しても活用することができます。
なお、関連する過去の調査の報告書や授業アイデア例など、これまで発行された資料の該当ページが記載されています。

平成27年度 全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた 小学校 授業アイデア例

国語 算数 理科

「授業アイデア例」は、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえて、授業の改善・充実を図る際の参考となるよう、授業のアイデアの一例を示すものとして、国立教育政策研究所において作成したものです。
本書で示された授業は、調査の時学年だけでなく、学校全体で継続的・継続的な取り組みによって改善を図っていくことが大切です。
「授業アイデア例」が、日々の授業や研修会など様々な場面で活用され、児童生徒の学習状況の改善につながることを期待しています。

目次	ページ
授業アイデア例の紹介	1
国語 P.3~P.8	
「自分の思いや考えを機軸付けるために活用しよう」	3
「自分の思いや考えを機軸付けるために活用しよう」	4
「自分の思いや考えを機軸付けるために活用しよう」	5
「自分の思いや考えを機軸付けるために活用しよう」	6
「自分の思いや考えを機軸付けるために活用しよう」	7

ポイント3：「指導⇒見届け⇒指導しきる」を大切にした授業を

授業前

実態を見届ける

“つまずき”を予想し、指導の手だてを練る

授業中、つまずきの様相を示す子どもたちの状況は様々です。例えば算数の学習で言えば、問題文の解釈の段階でつまずくのか、立式の場面でつまずくのか、計算でつまずくのか、人それぞれです。

だからこそ、授業前に行う「実態の見届け」が大切になります。前時までの学習状況から実態把握をしたり、前ページで紹介した解説資料の「誤答分析」や「誤答について」を基に見童生徒一人一人の解答状況に着目したりすることで、その子に応じた指導・援助ができるようになります。



本時では、どの子が、どのようなことに“つまずく”心配があるのかな？
その状況に応じるためには、どのような指導が必要だろうか？

問題番号	解答類型	正答
2	(3) (正答の条件) 0.4や0.3が、ハードル1台当たりが増える時間であることを書いているもの (正答例) 0.4や0.3は、ハードル1台あたりが増える時間であると書かれます。 0.4や0.3が、ハードル1台当たりが増える時間であることを書いているもの	
1	0.4や0.3が、40mハードル走のときに増える分の時間をハードルの数でわった数であることを書いているもの	◎
2	0.4や0.3が、40mハードル走のときに増える分の時間をハードルの数でわった数であることを書いているもの	○
3	増える時間であることを解答しているもの	
4	走る距離を基にしているもの 例 40mの0.01倍であると書かれます。 ハードルの数を基にしているもの	

■誤答について
【例1】40mの0.01倍であると考えられます。(解答類型4)
0.4の4を、走る距離である40mと対応付けていると考えられる。
【例2】40mの0.1倍であると書かれます。(解答類型6)

「解説資料」の「誤答の種類」を参考に、実態を捉える

<指導する>

学習状況を見届ける

“つまずき”の状況を把握する

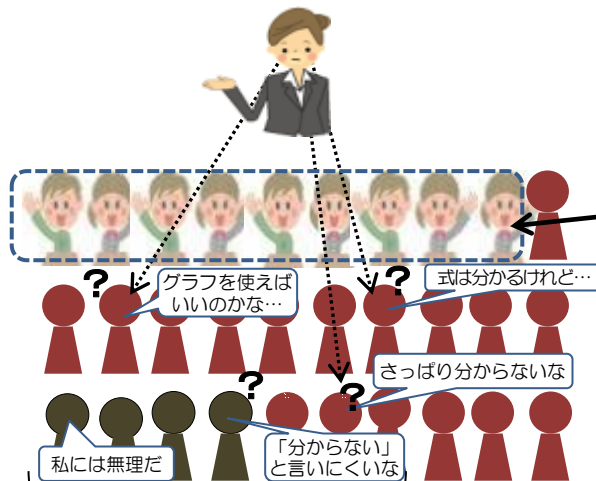
例 H28 全国調査 中学校・数学B 3 (3)

◇事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する問題。

【H28 県速報値】

正答率：30.6%

<無解答率：20.4%>



<無回答だった子どもたち>

この正答率及び無解答率の状況を授業場で考えてみましょう。

挙手発言を求める場面において、約3割の子どもたちが挙手をして、その子たちの発言だけで授業を進めていないでしょうか？

また、子どもたちの「はい、分かりました」という反応に、安易に「よし」と判断して、授業を進めていることはありませんか？

一人一人が正しく説明できるようにするためには、挙手していない子の学習状況に着目して授業を進めることが必要です。

また、「分かりました」と言った子どもたちの中には、「何となく分かった」というあいまいな状況の子どもたちが多くいるものです。「何が分かったのか」と問い返したり、「つまずく」と予想した子に目的的に机間を回ってノート等の記述をチェックしたりするなど、学習状況を見届けることが大切です。



Aさんの説明を自分の言葉で話すことができるかな
Aさんの考えと同じ人は、どこが同じか言えるかな。



どうですか？
はい、分かりました

<指導する>

前ページから

ここでは、個々の“つまずき”の状況に応じた指導をしなければなりません。そのために何を用いてどのように指導するのか、
→ 事前に準備しておいた手だてが生きる場面です。



定着状況を見届ける 「分かったこと・できるようになったこと」を確認する場を確実に確保する

授業の終末で、分かったことを（論点を絞って）記述させたり、確認問題を解かせたりすることで、「分かったこと」「できるようになったこと」を確認することが大切です。そのために、定着状況を見届け、不十分な子どもに指導・援助できる時間を確実に確保したいものです。

この確認問題は、全員が解けるようにするよ。
解けた子はどんどん次の問題に進んでいいよ。



時間がなくなってしまったから、「確かめ問題」は宿題にするよ。



<指導しきる>

- ・確認問題を解く前に、自信がもてない子は、前に集まって。
- ・答えと違う子は、先生のところに集まって。一緒に考えよう。
⇒ “つまずき”の状況ごとに指導した後、机に戻ってもう一度問題に挑戦してみよう。⇒ 机間を回り最終確認
- ・確認問題をクリアした子は、次の問題に進んでいこう。



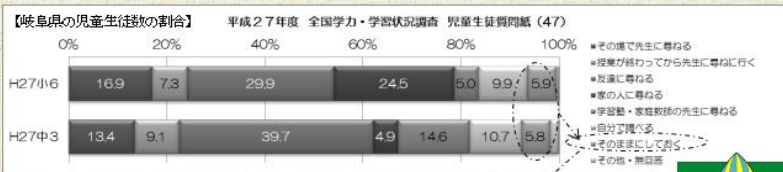
**分からないまま、
できないまま、
授業を終えない！**

【参考】

子どもの実態から

■児童生徒質問紙調査（平成27年度全国調査）

○小・中（47）「授業の中で分からないことがあったら、どうすることが多いですか」



「分からないことをそのまましておく」子どもたちの割合“ゼロ”を目指す！



■児童生徒質問紙調査（平成27年度県調査）

○「●●の授業の内容は、よく分かる」 *「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合

	国語	社会	算数、数学	理科	音楽	図工、美術	雑技・雑	体育、保健	外国語、英語
小4	79.8	80.1	79.5	88.7	86.7	92.6		93.0	
小5	80.8	81.2	77.7	88.9	83.4	91.3		89.3	73.4
中2	72.3	71.0	68.0	69.4	75.9	76.3		78.5	65.0

授業の内容が「よく分かった」と言える子どもたちの割合を増やす！



こんな質問紙調査の質問にも着目してみましょう

■児童生徒質問紙調査

○小・中（33）「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」【新規項目】

■学校質問紙調査

○小・中（55）「国語や算数〔数学〕において、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、児童〔生徒〕の資質・能力がどのように伸びているかを、児童〔生徒〕自身が把握できるような評価を行った」【新規項目】

3 参考資料

平成28年度 県教育委員会による学力向上施策



「オール岐阜」による取組の強化・充実

<体制>

◆「オール岐阜」学力向上連絡協議会

<連携方針の明確化・協力体制の構築>

- 岐阜県学力向上アドバイザー
- 大学教員
- 小中学校教育研究会
- 小中学校校長会
- 市町村教育委員会
- 県教育委員会、各教育事務所（事務局 学校支援課）

◇学力向上推進会議

- ・地区別全体会…年3回
(各教育事務所の開催要項による)
- ・県企画会…年2回
 - 各地区の学力向上推進教師リーダー
 - 市町村教育委員会代表者
 - 小中学校教育研究会代表者
(小中全教科の部会 各1名)
- ・県全体会（指導改善説明会）…年1回
 - 全小中学校：学力向上推進教師等

◇課題に応じた教材の作成

- ～教科学習Webシステムの有効活用に向けて～
- 県教育委員会 ○教育研究会

◇学力調査分析会議

- ・「国、算・数」…年6回
- ・「社、理、英」…年2回
- <学力調査の問題・結果分析、指導改善資料の作成>
- 関係大学教員
- 県教育委員会
 - ・教育事務所5教科担当者
(事務局 学校支援課)

◇大学・市町村と連携した授業改善支援プロジェクト

- ・大学と連携を図り、市町村教委と一体となって、各学校の授業改善に向けた取組を支援する。
- <年5回程度の教委・学校訪問>
(講師：大学教員、昨年の教科専門性指定校実践者等)

◇授業改善アクションプラン（学力向上総合推進事業）

<小中全教科・小中学校教育研究会と連携して実施>

◇中学校英語授業における学習評価改善事業（英語教育イノベーション戦略事業）

<小中学校英語研究部会と連携して実施>

「オール岐阜」学力向上連絡協議会から

平成28年5月11日に、大学、教育研究会、校長会、市町村教育委員会、県教育委員会の関係者35名が参加して、「『オール岐阜』学力向上連絡協議会」が開催されました。学校支援課より、平成28年度の学力向上施策について説明するとともに、昨年度大きな成果をあげた「大学との連携による学力分析」の取組について、岐阜大学より紹介していただきました。



参加者から、本県の学力向上に係る取組について、次のような貴重な御意見をいただきました。

- 学校は、県や市の施策を真摯に受け止め、学力の向上を図るためによく努力しており、「3つの見届ける」を大切に授業が広がっていると感じている。学校が捉えきれていない課題について、大学と連携する中で明らかになる取組は意義がある。
- 全国学力・学習状況調査において、正答率が関心の対象となるが、問題がどのようにつくられているのかを理解することが、授業改善につながっていく。
- 教科書を丁寧に扱う指導が大切である。算数でいえば、教科書の記述は、非常に論理的で端的に表現されており、教科書に沿って学んでいくことで筋道立てて考えることができるようになる。
- 1時間の授業の中で、最後の評価問題までやることを意識するようになった。授業だけでは理解できていない子どもたちがいるのも事実であり、理解が不十分のままにいる子どもたちにどのような手立てをうつのかということを考えなくてはいけない。
- 教育研究会と連携して、全教科で学力向上に取り組むことはとても大切なことである。教育研究会も、学力向上につながるよう研究内容を改善しているが、研究テーマが、県内の子どもたちの課題にどう結び付いているのかという視点についてはもっと考えていかなくてはいけない。
- 授業改善に当たっては、現場の先生方の考えをボトムアップ方式で汲み取り、主体的に授業を考える教師を育成していくことが何よりも大切で、そのための支援を行っていきたい。
- 授業改善に対する先生方の熱意と創意が重要である。時間はかかるが、なぜそのような取組が必要なのかを先生方が考えることによって、子どもに力を付ける指導ができるようになる。

「大学との連携による学力分析事業 報告書(岐阜大学)」から

【提言】「全国学力・学習状況調査結果に基づく授業改善」

- Q1 : A問題は基本問題でB問題は発展問題なので、まずA問題を解く力を付けないと、B問題を解く力を伸ばすことはできませんよね？
- Q2 : B問題のような長くて読解力が試される問題は、教科書にほとんどないので練習できません。どうやってB問題を解く力を伸ばしたらいいのですか？
- Q3 : B問題のような長くて難しい問題を授業の終末の練習問題で扱ったとしたら、全員が正解することを見届けるなんてできないと思います。B問題を解く力を伸ばすには、どうしたらよいのでしょうか。
- Q4 : 研修会を受講して、B問題の趣旨を活用すればいいことが分かりました。考え方は分かったのですが、具体的には毎日の授業でどこをどうしていったらいいのですか？
- Q5 : 「全国学力・学習状況調査」が行われていない教科は、どのように授業改善を進めていけばいいのですか？

(本報告書は、平成28年3月末に全小・中学校に配布されました。)

